

未来^眼とうほく 第19回

したたかで、しなやかな、いぶし銀の人間となれ

戦後の新教育制度によって1949年に発足した秋田大学は、1910（明治43）年設立の旧制秋田鉱山専門学校を母体とする鉱山学部と、旧制師範学校を母体とする学芸学部（現在の教育文化学部）の2学部でスタートした。その後、1970年には、国立大学では戦後初めての医学部が設置された。また、日本で唯一の「鉱山学部」は、工学資源学部を経て、2014年に理工学部へ改組され、新たに国際資源学部が設置された。今回の対談では、このように非常に特色のある大学のトップに立つ澤田学長にお話をうかがった。

鉱山資源のグローバル化

●町田 貴学の工学資源学部（旧鉱山学部）は、日本唯一の官立鉱山専門学校である旧制秋田鉱山専門学校以来、100年以上の歴史を誇っています。それを、2014年4月に理工学部へ改組し、新たに国際資源学部を設置され

ました。この辺りの狙いについて、まず伺いたしたいと思います。

●澤田 現在の世界情勢を考えてみますと、鉱山資源の重要性が非常に高まっています。そうした中で、資源の確保や、資源国の援助、資源をめぐる人間関係の構築など、鉱山資源を取り巻く環境もどんどんグローバル化しています。そこで、1910年の旧制鉱山専門学校から新制の鉱山学部を経て、これまで積み上げてきた本学の鉱山学の研究は、鉱山資源に乏しい日本の発展に役立つべく、一層重要になってきたと認識しています。もっとも、私は2014年4月から学長に就任しましたので、前任の吉村学長（現・東北公益文科大学学長）に先見の明があったと申し上げたいと思います。

●町田 そうした動きも関係しているかと思われませんが、貴学は海外からの留学生が多いですね。200名くらいでしょうか。

●澤田 200名を超えていた時期もありますが、大体200名前後で推移しています。中国からの留学生が一番多いのですが、近年ではベトナム、インドネシア、タイなど東南アジアが増えてきて、直近では南アフリカ、ボツワナ、モザンビークなどアフリカからも来ています。例えばボツワナは、ダイヤモンドなどさまざまな金属が豊富に採れる国で、本学に留学して卒業した方が、現在はボツワナの鉱山関係の政府機関で活躍しています。現在も、ボツワナからの留学生が4人おり、みなさん一生懸命勉強していて優秀な方ばかりです。つい先日には、ボツワナの大使も秋田を訪問してくださいました。

●町田 これから、ますます発展が期待される学問領域ですね。

縦割りに横串を通す医工連携

●町田 もう一つ、貴学の特徴的な動きとして「医工（医理工）連携」があります。2014年7月には秋田県と覚書を締結し、9月には、私が会長を務める北都銀行とも新戦略連携協定を締結していただきました。この狙いや背景はどういったものなのでしょうか。

●澤田 秋田県は意外と医療産業が活発で、医療機器

生産金額は全国14位（平成25年、厚生労働省統計）です。したがって、まず一定のインフラがあります。また、医療機器は多様性に富んでいますから、いろいろな工程が必要になります。つまり、地場産業を全国に広めていく上で、医療産業はポテンシャルが高い分野だと思います。また、将来的に医療特区のようなものを考えた場合、県と連携していると、何かとやりやすい側面もあります。さらに、北都銀行とも提携することで、具体的なアクションが促進されるのではないかと期待しています。

●町田 貴学の医学部では、手術支援ロボット「ダ・ヴィンチ」を導入されていますね。ああいった高額な機器を地域で作るといえることですか。

●澤田 そこまでできれば素晴らしいと思います。病棟で実際に働いている看護師さんや技師さんが「こんなものが必要だ」ということを、理工系の先生や企業の方と一緒に語る「夢を語る会」を立ち上げました。まだ小さなものが主流ですが、最近では外科の南谷教授が中心となって、迅速病理診断システムという医療機器を開発しました。今は、少しずつステップを踏んでいる段階です。

●町田 秋田県は秋田市一極集中で、良い面も悪い面もありますが、医工連携に関していえば、秋田大学医学部の高い医療水準が県内に平均化していく効果に期待したいところです。

●澤田 一つ、技術の頂点に立つところがあって、それにみんなが参加していくという感じですね。大変ですが、がんばらなければなりません。

●町田 経産省が推進する規制改革と軌を一にしておりますので、ぜひ進めていただきたいと思います。インターディスプレイナリー（学際的）、すなわち、これまで縦割りだったものに横串を通すことで、新しい付加価値を作っていくことが非常に大事だろうと思いますので、そういう意味でも医工連携は時宜にかなったテーマだと痛感しております。貴学がそれに組み込まれていることは大変うれしいことです。

●澤田 ありがとうございます。「医」の分野に、それとは直接関係のない「理工」の先生が入ることで、いろいろな接点が生まれてきています。町田議長のおっしゃる「横串」を実感しています。

●町田 今後はどのような取り組みをお考えでしょうか。

●澤田 平成28年度から「医理工連携コース」を作り、「医」の言葉も「理工」の言葉も理解できる人材を育成していく予定です。先々には大学院も新設したいと思っています。

大学があって街がある

●町田 秋田県はご存知のように、少子化、高齢化、人口減少ともすべて全国ワーストレベルです。流行の言葉を用いれば、今後どうやって秋田県の「地方創生」に取り組んでいくかについて、学長はどのようにお考えでしょうか。

●澤田 大学の役割としては、いろいろなイノベーションを通じて仕事を県内に作り、それによって地域の経済力を上げて、若い人が就職できるような環境を構築することが挙げられます。そうすれば、優秀な学生が秋田大学に入ってくれるでしょう。そして、卒業生がさらに新しいイノベーションを地域に生み出すことができれば、プラスの循環が生まれると思います。恐らく、それが大学の1つのミッションではないかと考えています。

●町田 大変素晴らしいお考えです。地域に雇用を生み出すことは、若者の流出を防ぐ重要な解決策です。一方で私は、学長が提唱されている「カレッジタウン構想」にも感銘を受けました。老いも若きも、海外からの留学生も加えたコミュニティを、キャンパスと一体になって作るというご発想には大変共感できます。

●澤田 私がそう考える背景は2つあって、1つは、人口減少を所与のものとして、新しいコミュニティを構築していく必要があるということ。もう1つは、学生が大学の教員だけでなく、社会からもいろいろ学んだ方がよいということです。世代も国境も越えたグ



澤田 賢一（さわだ・けんいち）

1952年北海道生まれ。私立函館ラ・サール高等学校から、1976年北海道大学医学部卒業。専門は血液内科学（医学博士）。北海道大学医学部附属病院助手、北海道大学大学院医学系研究科助教授などを経て、2002年に秋田大学医学部教授。2012年4月から2014年3月まで秋田大学大学院医学系研究科長を務め、2014年4月に第12代秋田大学学長に就任。



町田 睿（まちだ・さとる）

1938年秋田県生まれ。東京大学法学部卒業後、富士銀行に入行。同行取締役総合企画部長、常務取締役を経て、1994年荘内銀行取締役副頭取、95年取締役頭取、2008年取締役会議長を歴任。09年10月よりフィデア・ホールディングス取締役会議長、北都銀行取締役会長、11年6月より荘内銀行取締役相談役、12年6月よりフィデア総合研究所理事長をそれぞれ務める。12年4月より2年間、東北公益文科大学の学長を務め、14年10月に同大名誉教授の称号を授けられた。



石油貯留岩の調査を行う大学院生（場所：秋田県男鹿市脇本）

ローバルタウンがキャンパスに隣接したところにあると、いろいろなことが展開できるのではないかと考えています。本当は、そうしたエリアをキャンパス内に作りたかったのですが、文科省と相談して難しいことが分かりました。ですから、いずれキャンパスの近くに作れないかと考えています。

●町田 アメリカにシリコンバレーが誕生したのは、コミュニティづくりの中で、たまたまスタンフォード大学が近くにあって影響していると聞きました。

●澤田 そのとおりです。もう一つ例を挙げれば、医学分野に強いジョン・ホプキンス大学のように、病院ができて、大学ができて、そこに街ができるというのも、地域の一つの発展形かと思えます。秋田大学の周辺も、そうした地域になれば理想的だと思います。

●町田 おっしゃるとおりですね。

シニア世代は生涯現役で

●町田 都会では、団塊の世代が定年を迎えて、その多くはいくらかの退職金をもらって、まるで「毎日が日曜日」の生活を送っています。大変もったいない話です。その人たちが、こういう自然豊かな地域に移り住んで第二の人生を送ってもらえば、カレッジタウン構想も非常に生きてくるのではないかと思います。

●澤田 「学び直し」とよく言われますが、「教え直し」もあってよいのではないかと思います。例えば、高齢者が大学のセミナー等に参加して、時には講師になっていただくことも考えられます。

●町田 そうですね。高齢者の強みは「経験」と「人脈」だと思いますので、それらを提供して若い人たちに刺激を与えることができれば、大きな生きがいとなるでしょう。

●澤田 私が大学病院に勤務していた頃、教室には一つの合言葉がありました。それは、「子どもは天からの授かりもの。いつできてもいい」というものです。例えば、「医師としての研修期間中は避けよう」とか、「大学院生の間は避けよう」とか、そういうことはなく、いつできてもみんなでサポートするからという空気がありました。これからはそうしたサポート役として、元気なお年寄り、いわゆるアクティブシニアを積極的に活用してはどうか思います。例えば、病院を定年退職した看護師を保育園で再雇用すれば、多少の制約があるとはいえ、プロフェッショナルとして働いてくれるでしょう。シニア世代が活躍して、地域で子どもを育てるようなコミュニ

ティがあってもいいかもしれません。少子化対策にもなるでしょう。

●町田 全く同感です。私は、定年制ということ自体がすでに時代遅れだと思っています。本人が健康で、働く意欲と体力があれば、言葉は悪いですが「死ぬまで働く」くらいの気概が必要だと考えています。ハッピーリタイアメントで遊んで暮らすという文化は、実は、日本人にはあまりなじまないのではと感じます。

●澤田 私もそう思います。家内と一緒に温泉に行った時のことです。夕食時に隣のテーブルにいたご夫婦が、ほとんど1年中旅行しているという話でしたが、食事にも興味がなさそうで、夫婦の会話もほとんどありませんでした。やはり、日本人は、遊ぶよりは何かミッションがあった方がいいのかなと思いました。

●町田 そうですね。自分以外のために役に立つ、これが結果としては、自分のためになっているのです。「情けは人のためならず」ということわざがありますが、やはり何か「自分以外のために役に立ちたい」ということが、生きるエネルギーになるのではないかと、この年になると感じます。

●澤田 分かります。いつまでも人から「ありがとう」と言ってもらえることは、うれしいものです。

したたかで、しなやかな、いぶし銀

●町田 今度は視点を「子ども」に移したいと思えます。ご承知のとおり、秋田県の小中学生の学力は全国でもトップクラスです。これは、貴学の卒業生が秋田で先生をされていることも影響しているのではないのでしょうか。

●澤田 そうおっしゃっていただくとありがたいです。秋田大学にある附属4校園（幼稚園、小学校、中

学校、特別支援学校）の存在も大きいと思います。そこに県内の優秀な先生方が何年か子どもたちを教え、教え方の工夫をして戻っていきます。大学もそこで、教育のあり方などを研究、議論します。私も、医学部にいた頃はあまり分かりませんでした。学長になり、教育文化学部の先生方とお話ししますと、がんばっている様子が伝わってきます。

●町田 なるほど。そういう取り組みが成果となって現れているのですね。

●澤田 また、聞くところによると、教育にも授業のやり方や組み立て方などに「匠の技」があるそうです。これから大量に先生方が退職する時期になりますので、それらがうまく伝承されるか心配しています。さらに、秋田は家庭学習の時間が全国的にも長いのです。逆にいえば塾通いが少ない。教育に関しては、われわれの誇りです。

●町田 よく分かりました。さて、学長が秋田大学の学生さんに期待することは何でしょうか。

●澤田 私の「澤田ビジョン2014」にも書きましたが、「したたかに、しなやかに、いぶし銀のように」、これを実践してほしいと思っています。秋田大学は旧帝大とは異なり、スーパーグローバルとか、世界のトップ100に入れとか、そういうミッションはありません。しかし、個人としてはどの分野でも常に世界のトップを目指してほしい。それが「したたかさ」の意味です。「しなやかに」というのは、普通にやってもトップにはなれませんから、自己のイノベーション、つまり自分を変えていく工夫をすることで、もっとパワーが出せるという意味です。その結果として、「いぶし銀」の一流になればいい。そうすれば、おのずとプロフェッショナルとしての道が開けると、学生には期待したいです。

●町田 いいお話を伺いました。

人生は「プラスマイナスゼロ」が面白い

●町田 ややプライベートなお話になりますが、北海道と秋田のご経験が長い学長の目からご覧になって、両地域の違いはどのように感じられるのでしょうか。

●澤田 まず人柄に関していえば、北海道はいろいろなところから開拓民が集まっていますので、お互い干渉しない、どこか個人主義的な面がありますね。私が北大で医局長を務めていた頃、北海道とゆかりのない本州の方が、北海道に憧れて教室に入ってくるのがあったのですが、よく「みなさん少し冷たい」という



教育文化学部附属小学校での教育実習の様子

話をされていました。そんな時は、「冷たいのではなく、干渉していないのだよ」と言ったものです。

●町田 秋田県民の人柄はどうでしょうか。

●澤田 最初は何となくおとなしくて口数も少ないのですが、仕事を始めたらきっちりやります。その粘り強さと確実性はすごいと思います。また、北海道は開拓から100余年なので、自分たちで文化を作ってきたという自負があり、それはそれでいいのですが、秋田には、日本の原点を思わせるような伝統的な文化があって、それもまたすごいと思います。

●町田 私の故郷である秋田を褒めていただいて光栄です。最後に、座右の銘がございましたら教えてください。

●澤田 「人間万事塞翁が馬」ということわざが好きですね。誤解を恐れず言えば、社会的に恵まれなければ結構時間ができます。時間ができれば、そこで力を蓄えることができます。力を蓄えれば、また社会からお呼びがかかることもあります。研究も同じです。なかなか思った結果が出ないときに、いろいろと修復してがんばっていると、次のテーマが浮かんできたりします。ただ、暇なときに何もしないと「塞翁が馬」にはなりません。

●町田 それは、学長のご経験に基づく理解してよろしいのでしょうか。

●澤田 自分で言うのも恐縮ですが、私は、はたから見ると順調な道を歩んできたわけではありません。業績を上げてなかなか評価されない時期もありました。それで、若い人に時々言うのは、「人生はプラスマイナスゼロで、振幅が大きい方が面白いかもよ」ということです。

●町田 大変興味深いお話を聞かせていただきました。本日はどうもありがとうございました。